様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 ２４ 日現在

機関番号：１０１０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2023
課題番号：１８Ｋ０１１８９

研究課題名（和文）動物の身体をめぐる3つの位相からみる生物とモノの連続性

研究課題名（英文）Analyzing the continuity between organisms and objects through a comparison of the animal body as three phases

研究代表者
山口　未花子（yamaguchi, mikako）

北海道大学・文学研究院・教授

研究者番号：６０５０７１５１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、カナダ先住民が狩猟を通じて動物が資源/モノへと変化する過程を、調査者自身のフィールド調査及び狩猟実践を通じ経験的にとらえなおすことを目的とした。研究を通して、動物との身体を通じた接触が守護霊などの超自然的な観点や動物と人の社会関係の形成に大きな影響を与えていること、肉や毛皮などのモノとしての動物との接触にもそうしたつながりを維持する役割があるという点について明らかにした。また、類似する環境に生活しながら異なる物質文化を持つ二つの先住民集団比較から、動物の身体が人に働きかけるだけでなく、動物をえがいたモノが集団の形成や維持に寄与することについても示すことができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
近年人類学における「動物」論の議論では存在論など観念的な部分に焦点が当てられており、動物が物質的に形を変えるという点にはあまり着目されてこなかったが、本研究では個別に検討されることが多かった動物の物質性について、生きている状態から狩猟されて遺骸となり、肉や皮製品になり使用される過程としてとらえることで、動物と人のインタラクションがどのように生成変化するのかを明らかにし人類学の動物研究に新たな視座をもたらした。また、動物との身体的なかかわりが具体的に人間社会に与える影響を示し、アートや物語を新しい視点から検討することを可能にしたという点で人類学以外の分野にも成果を拡張する可能性があるといえる。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to empirically reconsider the process by which animals are transformed into resources and objects through hunting by indigenous Canadians, based on the researcher's own field research and hunting practices.
Through this research, it became clear that physical contact with animals has a significant impact on supernatural perspectives such as guardian spirits and the formation of social relationships between animals and people, and that contact with animals as objects such as meat and fur also plays a role in maintaining such connections.
In addition, a comparison of two indigenous groups living in similar environments but with different material cultures showed that not only animal bodies work on people, but also that objects carved from animals contribute to the formation and maintenance of groups.

研究分野：人類学

キーワード：動物　アート　カナダ先住民　モノ

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

動物に関する研究は、今日の人類学において存在論的転回やマルチスピーシーズ人類学の議論が深まりを見せるなどにおいて活発に行われている状況にある。こうした中で申請者はカナダ先住民カスカと動物との関係から人と動物との互酬性や連続性を明らかにし、議論形成に一定の役割を果たしてきた。このなかで研究代表者は科研『野生動物資源の贈与交換に潜む動物とのパートナーシップ』(2013 年～2017 年）において北米先住民による動物資源利用を通じて生成される人・動物のインタラクションについて研究を実施した。

ただし、生きている動物、肉や皮の状態、そこから作られたモノ、という異なる相に関する視点が抜け落ちていた。人ではないが生きているものとしての動物と、死んだ動物の身体を、人間が必ずしも同じものと認識するわけではない。一方でモノとなった動物の体も、依然として動物としての特徴をもち、さらには使用される中で新たな意味を獲得することもある。こうした点については、近年の文化人類学において活発に議論されている「モノのモノ性」に関する議論、アフォーダンスやアブダクションとった概念を用い、モノが人間に働きかけるという観点を導入することで、これまでの研究を発展的に継続するものとして位置付けた。

２．研究の目的

これまでの研究を通して、動物利用の根底に動物との互酬性や連続性が存在する一方で動物が生体から遺骸へ、そして道具やアートなどのモノへと形を変える中で人がそこから受け取る感覚に差異がある可能性が指摘された。こうした点について、モノが人間に使われたり、意味や価値を付与されたりするという側面だけでなく、モノの側からの人間への働きかけや、モノと人の相互的作用によって出来事が生成されるような、モノ研究の視点を取り入れることで検討することを目的とした。さらに、カスカの動物資源利用には見られないような動物の表象としてのアートを発達させてきた、内陸トリンギットを調査対象に加え、象徴化された動物との関係についても検討する。内陸トリンギットは、内陸亜極北針葉樹林帯において陸生哺乳物の狩猟や漁猟を活発に行うなどカスカと同じアサバスカン的な生業を維持してきた一方でトーテムポールなどの様々なアートを制作する。これらのアートについて彫刻家が、「狩猟をすることと芸術活動は切り離せない」と語ったり、儀礼やイベントの際に、自分のクラン動物の仮面や毛皮をかぶり、動きをまねて踊ったりするなど、アートと動物との結びつきが示されている。一方でカスカは、動物の守護霊をもつなど、トリンギットにはみられない動物文化をもつものの、それらは不可視のもの、個人的なものが多い。こうした点を比較することで、狩猟による動物との関係という基盤を共有しながら、モノとして表彰される動物を介した人・動物関係と、守護霊など、超自然的な動物との結びつきを基盤とした人・動物がどのように生じるのかを明らかにすることを目的とした。

３．研究の方法

本研究では分析概念として生きている動物（生体)、死んだ動物（遺骸)、動物の身体から作られたモノ（モノ)、という 3 つの位相を用いる。そしてそれぞれの相が、人間にどのような認識をもたらすのかを詳細に分析することによって、動物が人間に働きかけるものの本質を明らかにする。

さらにこうした観点から、申請者自身が日本およびカナダで狩猟を行い、実際に動物と対峙した時の心の動きを経験的に理解するためにより深く理解する手法を用いた。具体的には ①カナダ先住民カスカ、内陸トリンギットを対象としたフィールド調査、②国内における狩猟の実施、③カナダ先住民に関するデータの狩猟実践を通じた検討という 3 つの柱に基づいて研究を進めた。フィールド調査では、カスカおよび内陸トリンギットの人々が、生きた動物との対峙（狩猟など)、遺骸との対峙（解体、分配など)、モノとの対峙（食事、なめし皮の道具作りや、装着時など）それぞれの場面でその動物に対してどのような感情を持つのか、あるいはどのように扱っているのか、儀礼の有無なども含めて詳細な調査を行った。特に内陸トリンギットの調査ではこれまでに扱ったことのないアートについて、集中的な調査を実施し、アートの作り手、所有者など多様なアクターがアートにどのような動物性を見出すのかを検討した。また、②は日本においてはコロナの流行もあり、居住地である北海道を中心として、若手狩猟グループとの連携体制を整え安全を確保したうえで、できる限り狩猟実践を行い一年に 3，4 頭の捕獲とその解体や加工を実践した。またこの際①のフィールドワークおよび 2005 年以降継続して行ってきたフィールドワークとその分析結果についても併せて狩猟のプロセスの検討に用いた。

４．研究成果

<u>カナダでのフィールドワーク</u>

2018 年度は 7 月にカナダ、ユーコン準州で開催された内陸トリンギットコミュニティにお

けるトーテムポール建立セレモニーに関するフィールド調査、9 月にはカナダユーコン準州のカスカのコミュニティにおける葬送儀礼に関するフィールド調査を実施した。7 月の調査では、セレモニーにおいて用いられる「レガリア」と呼ばれる装飾品がどのように製作、贈与されるのか、また当日どのように身に着けられ、パフォーマンスの中で役割を果たすのかといった点に注目した。そこから、動物に象徴されるクランや、祖先が内陸トリンギット内の人間関係の構築、維持に大きな役割を果たしているという点が明らかになった。また、その背景として、特にカスカなど古くからユーコン内陸部に居住してきた近隣の民族と比較して、比較的新しい時代に移動してきた海岸トリンギットと内陸のアサパスカ系諸民族との融合によって内陸トリンギットが形成されてきたという歴史的経緯が関係している様子が示唆された。また、カスカの葬送儀礼においても墓石にクラン動物を刻むなど、象徴的に動物を用いる様子が見られた。カスカもトリンギットの影響と考えられるクラン制度をもっており、このクランが墓石に刻まれることが多い。ただしクラン動物は 2 種類で内陸トリンギットの 5〜6 種類に比較すると少ないなど、コミュニティ内の社会システムにおける動物の象徴利用は、カスカでは限定的で、むしろ、個々人の狩猟やメディシン・アニマルを通じが動物とのつながりに重点が置かれてきたことが示唆されており、儀礼の場面での動物の象徴的な表現の在り方という点で、目に見えるモノとして二つの集団に類似点が認められながらも大きな違いがあることが明らかになった。

2019 年度は内陸トリンギットの人々が連帯を深めることを目的とした祭りについて準備段階からフィールドに入り調査した。この中で、視覚芸術の役割や宴会で供される動物種とコミュニティとの結びつきといった新たな知見が得られるとともに、描かれたが人々の紐帯を維持する重要な役目を果たしていることが確認された。また人々が動物への親密さを、物語を通じて培い、例えば海に生息するシャチのような見たことのない動物を身近な存在、自分のルーツとして感じることが可能になると同時に、これが動物を描くこと、描かれたモノと相互作用を持つことも明らかになった。これは、実際に触れ合うことのない動物のイメージが物語やアートを通じて人々の中に動物との連続性を作り出し維持する働きをしているということでもある。

2023 年度は動物資源の獲得から毛皮や骨、角などの加工、アートへの活用など、動物の身体を直接用いるアートの制作を通じて、資源としての動物の物理的な側面だけでなく象徴的な側面からも検討することができた。このなかで、毛皮や角などを用いることが集団を象徴するクラン動物や社会的地位を表すだけでなく、その動物を捕獲し解体することなどを通じた個人と自然とのつながりや物語の生成に寄与することが確認できた。さらに動物の毛皮や羽などが単に視覚的な効果を担うだけでなく、踊りなどを通して動きの変化、特に動物らしさを付与するという点についても明らかになった。

日本での狩猟実践

2019 年は先輩猟師から北海道の山林で狩猟を行うノウハウを身に着けた。2020 年以降は自分で 狩猟を実践しスピノザの影響を受けつつドゥルーズが語ったように、動物それぞれの「情動の束」が異なることを経験的に理解するなど、人間という動物種が動物と関わる時に、動物の中の種、種の中の個体、というような脱領土化された存在として動物と対峙し、その動物との間に生成変化するものがあることを確認できた。また、狩猟実践を重ねるなかで捕獲方法を工夫したり捕獲した動物を解体、加工したりする行為を通じて、動物の身体と狩猟者の身体がどのように関係を結び、その間に何が生成するのかを、より広いスパンで詳細に確認することが可能になっただけでなく、罠猟や銃猟といった異なる方法、捕獲場所や加工の仕方などによってどのような差異が生じるのかといった点など詳細に検討することができた。例えば季節に応じて変化する動物の行動や分布の範囲に合わせて場所や狩猟の仕方を変化させることで捕獲の効率が上がり、また季節や個体によって異なる動物の身体を同加工するのか、どう利用するのかという点では動物の身体が猟師をアフォードするような側面も確認できた。また日本における狩猟実践と動物の身体の加工や活用についても行い、調査同行者への聞き取りからも動物が捕獲され、屠畜され、解体される過程で徐々に動物から肉や毛皮へと認識や情動が 移り変わる様子とそうした変化のトリガーとなる要素として温度や器官としての「目」の持つ役割などが指摘された。また、捕獲したエゾジカの毛皮鞣しを経験することで、動物への強い情動や資源としての動物の身体の美しさ、加工の困難さといった点を自らの内部に起きた生成変化として理解することができた。

以上のように狩猟を実践しながらカナダ先住民の狩猟や世界観と比較することで、これまでの研究についてさらに深い理解や新しい発見をすることも可能になった。例えば動物の輪郭を正確にとらえることを重視するのは、森の中で動物を見つけやすくすることに寄与するが今年度の実践の中でその重要性を実感することができた。そうした観点からは動物の身体について人間が興味関心を描く心理的な背景として狩猟の技術としての重要性があることが経験に示された。また「描かれた動物」をテーマにした共同研究を通じてアーティストや他分野の研究者との交流を重ねることで、肉や毛皮といった動物の身体との直接的な接触が人間に喚起するイメージの強さや、人間だけでなく動物とのコミュニケーションのために芸術表現が使われる可能性についても検討することができた。

また、こうして得られた成果は著書の執筆オンライン記事、講演などの形で積極的に発信した他、2024 年度に東京の生活工房での展示実践としても公表される予定である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計5件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 山口未花子	４．巻 7
２．論文標題 つながりとしての肉食	５．発行年 2022年
３．雑誌名 現代思想 50	６．最初と最後の頁 207-215
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 山口未花子	４．巻 1
２．論文標題 生きる技術としての「メディシン」―ユーコン先住 民の超自然的な実践におけるジェンダー	５．発行年 2023年
３．雑誌名 第36回北方民族文化シンポジウム網走報告書	６．最初と最後の頁 21－26
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 山口未花子	４．巻 950
２．論文標題 ユーコン先住民に学ぶ動物とともに暮らす方法	５．発行年 2021年
３．雑誌名 学士会会報	６．最初と最後の頁 -
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 山口未花子	４．巻 48-5
２．論文標題 「動物」にとって気候変動はいかに経験されるのか：カナダ北方の森からの視座	５．発行年 2020年
３．雑誌名 現代思想	６．最初と最後の頁 164-172
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 山口未花子	４．巻 1
２．論文標題 内陸トリンギットと描かれた動物	５．発行年 2020年
３．雑誌名 第34回北方民族文化シンポジウム網走報告書	６．最初と最後の頁 47-52
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計10件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 山口未花子
２．発表標題 動物にうたう歌、動物として舞う踊り：カナダ・ユーコン準州の2つの先住民社会における事例から
３．学会等名 民博共同研究「描かれた動物」の人類学――動物×ヒトの生成変化に着目して、2023年度第3回研究会
４．発表年 2023年

１．発表者名 山口未花子
２．発表標題 動物と話すこと、を真剣に考える
３．学会等名 日本文化人類学会第56回研究大会
４．発表年 2023年

１．発表者名 山口未花子
２．発表標題 動物の皮から生まれるモノたち －ユーコン先住民の皮利用に学ぶシカ皮活用の可能性
３．学会等名 オンライン公開研究会　「皮革素材の利用と技術に関する領域横断的な調査研究～循環型ビジネスモデル構築のために～」
４．発表年 2022年

１．発表者名 山口未花子
２．発表標題 動物の皮から生まれるモノたち：カナダ・ユーコン準州の先住民による実践から
３．学会等名 講座「毛皮と北方民族」
４．発表年 2022年

１．発表者名 山口未花子
２．発表標題 ユーコン先住民の視覚芸術と口頭伝承
３．学会等名 国立民族学博物館共同研究「描かれた動物の人類学」2021年度第3回共同研究会
４．発表年 2021年

１．発表者名 山口未花子
２．発表標題 「描かれた動物」共同研究の目指すもの
３．学会等名 国立民族学博物館共同研究「描かれた動物の人類学」第１回共同研究会
４．発表年 2020年

１．発表者名 山口未花子
２．発表標題 ドゥルーズ＆ガタリ著『千のプラトー』第十章における芸術・あいだ・動物
３．学会等名 国立民族学博物館共同研究「描かれた動物の人類学」第２回共同研究会
４．発表年 2021年

１．発表者名 山口未花子
２．発表標題 皮から見るカナダ・ユーコン先住民の暮らし
３．学会等名 シンポジウム「北方先住民族の首領と毛皮」
４．発表年 2021年

１．発表者名 山口未花子
２．発表標題 描かれた動物が紡ぐもの－カナダ・内陸トリンギットの装飾品 ” レガリア ” の分析から
３．学会等名 日本文化人類学会第53回研究大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 山口未花子
２．発表標題 描かれた動物が紡ぐもの-カナダ・内陸トリンギットの装飾品 “ レガリア ” の分析から
３．学会等名 日本文化人類学会第53回研究大会
４．発表年 2019年

〔図書〕　計5件

１．著者名 暮しの手帖編集部、山口未花子他	４．発行年 2023年
２．出版社 暮しの手帖社	５．総ページ数 240
３．書名 何げなくて恋しい記憶	

１．著者名 山口　未花子、ケイトリン　コーカー、小田　博志	４．発行年 2023年
２．出版社 ナカニシヤ出版	５．総ページ数 228
３．書名 生きる智慧はフィールドで学んだ	

１．著者名 奥野 克巳、シンジルト、MOSA、宮本 万里、山口 未花子、近藤 祉秋、近藤 宏、大石 高典、島田 将喜	４．発行年 2021年
２．出版社 以文社	５．総ページ数 344
３．書名 マンガ版マルチスピーシーズ人類学	

１．著者名 飯野正子・竹中豊監修、カナダ学会編、山口未花子他著	４．発行年 2021年
２．出版社 明石書店	５．総ページ数 392
３．書名 現代カナダを知るための60章【第２版】	

１．著者名 蛯原一平、斎藤暖生、生方史数、山口未花子他	４．発行年 2019年
２．出版社 共立出版	５．総ページ数 288
３．書名 森林科学シリーズ第12巻森林と文化　-森とともに生きる民俗知の行方-	

〔産業財産権〕

〔その他〕

狩猟採集で生きる人々から学ぶ、自然と人間が祈りと贈与で循環する世界観 https://esse-sense.com/articles/71 [椅子と、森と] つくることにおいて ｜ 高橋三太郎× 山口未花子 https://www.youtube.com/watch?v=VFSV4Kud5zo&list=PLUJ-ibEZcb3-NwmJqAanH279GWU1vCDB4&index=6 人がダメなら動物に聞く！～人類学者が語るコロナ禍のフィールドワーク～ https://costep.open-ed.hokudai.ac.jp/like_hokudai/article/19007

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関